学位論文の要旨

論 文 題 目　博物館等施設の展示にみる自然の社会的構成に関する考察

広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
学生番号 D171175
氏　　名 谷　綺音

論文の要旨

本研究は、ある特定の地域の自然環境がどのように描かれているのか、そこにはどのような違いが認められるのか、そして、その異なる自然のイメージを描く主体は誰なのか、違いを生む背景は何なのかを博物館や博物館に準ずる施設の展示に焦点を当てつつ明らかにすることを目的とする。

このような研究の目的を達成するために、本研究では質的データの中でも特に文字情報に焦点を当ててコーディングや計量テキスト分析を行った。文字情報をはじめとした質的データ分析に関するいくつかの先行研究を参考に、本研究では 2 つの異なる視点から分析を行った。

1 つは展示主体となる博物館などが展示に解説をつける際にあえて触れない話題やテーマがあると考え、そのような特定の話題やテーマがどの程度、どのような内容で言及されているかに注目する視点である。この視点を「演繹的視点のテキスト分析」とし、この視点からは展示解説文を分析する際に、事前に想定したいくつかのテーマごとに、そこに記載されている事項の内容や量を計測し、テーマ間の力点のおかれ方の差と、その差が生まれる理由について考察した。

もう 1 つの視点は上のような仮説を置かず、解説展示の文言を中立的にテキスト分析し、展示解説の特徴を明らかにする視点である。この視点を「帰納的視点のテキスト分析」とし、ソフトを用いた定量的な分析によって、文字情報中の話題の出現の多寡や関係性に注目し、博物館が描こうとしている地域のイメージと観光客が期待するイメージを対比することによって、主体の違いによる地域イメージの認識の差異を客観的に把握することを試みた。この際に、各主体の発信している情報が実際の地域の自然と歴史のどの部分に注目しているのかを考えるために、地域の歴史的経緯も並行して調査した。

以下、「はじめに」を除いた第 2 章以降の内容を簡潔にまとめ、その後に今後の課題を述べる。

第 2 章では本研究の目的とその背景にある問題提起や概念について、各分野から先行研究を紹介・整理し、これらの先行研究を踏まえて本研究の学問的な位置づけを明らかにした。

まず、自然という言葉の持つ複雑で多様な意味を紹介し、人文地理学が自然についてどのような視点や疑問、課題を見出して研究を行ってきたのか、「自然の生産」論から「社

会的自然」研究まで、自然に関する議論の流れを簡単に紹介した。また人文地理学以外の、例えば環境思想や環境倫理学の研究分野において、自然保護や自然の価値などの自然に関する議論がどのように行われているのかを紹介した。

いずれの分野においても自然に関する議論の中で人間と自然の二元論について言及されていることが分かり、その二元論からの脱却や新たな考察を加えることに取り組んでいることが明らかとなった。また、「社会的自然」研究の流れを踏まえ、自然の表象に関して、自然景観の形成と博物館の展示における表象に関する研究を紹介した。このような諸研究を踏まえて、本研究の学問的立ち位置や研究の学術意義を示した。

第 3 章では、観光と教育をはじめとした多数の役割を持ちながらも、それらが時として互いに反発し合い、存在自体の議論も近年盛んになされている水族館の展示に注目し、瀬戸内海地域に存在する 3 つの水族館の展示解説文を対象に、「演繹的視点のテキスト分析」の視点から解説文の分析を行った。

その結果、水族館の展示解説文においては、水生生物の多様性や美しい海のような、美化された自然環境が情報発信され、来訪者に美しい海中世界を楽しむ娯楽を提供していることが明らかとなった。一方で、人と海の関係性や海辺の産業、生活文化、環境問題のような話題、現在発信されている瀬戸内海地域の地域イメージとは相反する歴史的事象についてはほとんど語られていないことが明らかとなった。また、「水族館はあくまでも生物に関しての情報を発信するべき施設である」という水族館側の姿勢もみられた。

第 4 章では、特定の水族館ではなく、市民が水族館や海に対してどのような印象を持っているのか、海に関する情報をどのように取得しているのかに関するアンケート調査を行った。

その結果、市民は水族館に対して「娯楽の場」と「(普段見られない)生物をみる場」の 2 つの場のイメージを抱いていることが分かった。これは先行研究でも示唆されていた結果と重なり、水族館がこれまで観光施設として物珍しさや娯楽性を積極的に市民に提供してきたことが、水族館のイメージ形成に影響を与えていると考えられる。

一方で水族館の利用のされ方をみると、水族館を継続して訪れる人々の割合は少なく、多くの人は水族館に行ったきりになっており、繰り返し水族館を訪れることがないため、水族館の教育的役割を十全に発揮できていないという現状も明らかとなった。

現代の日本において、水辺の自然環境全般の知識を体系的に学ぶことができる場は非常に限られており、そのような意味でも水族館の社会教育施設としての役割は大きい。そのため、どのようにすればリピーターを増やして水辺の生物や環境への理解を深める人々を増やせるのかが今後の課題といえる。

次に、第 5 章と第 6 章で、国内から国外にわたって数多くの人々が訪れ、複雑な歴史を持つ屋久島という観光地に存在する 4 つのビジターセンターの展示と、屋久島を実際に訪れた観光客のクチコミに注目し、「帰納的視点のテキスト分析」の視点から調査を行った。

第 5 章では、屋久島の持つ「自然の宝庫の島」と「林業の島」の 2 つの相反する歴史的側面を踏まえつつ、屋久島に存在する博物館やビジターセンターの展示解説文を対象に、屋久島の自然がどのように情報発信されているのかを明らかにした。

その結果、4 つの展示施設の展示解説文について、屋久島の生態系の多様性と島民の暮らしという 2 つの軸を基準に、各施設の傾向を相対的に把握することができた。前述した屋久島の持つ 2 つの側面に関しては、「自然の宝庫の島」という屋久島の自然環境の多様性に重点が置かれていることが明らかになった。「林業の島」としての屋久島は、近代化以前の民俗文化という文脈で語られることが多く、昭和期の大量の森林伐採と自然破壊、森林保護運動などの歴史的な事象はあまり語られていなかった。

第 6 章では地域の情報を発信する側ではなく、実際に地域を訪れる側がその地域の自然をどのように感じ、表現しているのかに注目して、大手観光クチコミサイトの屋久島に関するクチコミ情報を対象に分析を行った。

その結果、観光客の口コミから屋久島についてどのような話題が語られ、それらがどのような関連を持っているのかが明らかになった。具体的には大きく 8 つの話題がみられ、それらは「白谷雲水峡に関する話題」、「ウミガメに関する話題」、「屋久杉に関する話題」、「トレッキングツアー・ガイドに関する話題」、「天候に関する話題」、「滝に関する話題」、「全体的な屋久島の自然景観に関する話題」、「そのほかの話題」に分類することができた。

また、観光客は屋久島の自然に対して、審美的な価値づけを行っており、屋久島の自然に畏怖を感じたり、自然から癒しを得ていたり、肯定的に評価していたりすることも明らかとなった。

第 7 章では今まで行なってきた調査結果を踏まえ、水族館と市民の認識の差異や、地域の情報を発信する側とそれを受け取る側で、自然の語りはどのように異なるのかを検討した。

その結果、瀬戸内海地域の水族館での調査と市民に対する意識調査では、水族館は生物の多様性を中心に海の豊かさを伝えたいという考えがあり、それに沿って展示解説文も生物の生態や多様性を中心とした内容になっている。一方で、水族館を利用する側の市民の実際の水族館の利用の仕方をみてみると、水族館は水中の非日常の世界をたまに経験しに行くという、必ずしも海をはじめとした水生生物や海の環境を学ぶ場になっているわけではない、という両者のズレがみられた。

また、屋久島地域に関する調査では、展示施設と観光客のクチコミで共通して重点的に触れられているのは「自然の宝庫の島」という屋久島の側面であり、林業、特に昭和以降の林業やそれに伴う環境問題については展示解説文で少し触れる程度で、観光客のクチコミにはほぼ登場しなかった。観光客の口コミの中でも自然環境の損壊について言及があったが、それらは観光客増加による自然破壊を憂慮する旨のものであった。

これらの調査結果を踏まえ、地域の自然がどのように表現・構成されているのかについ

て、先行研究と関連した地域イメージの創造プロセスや人間生活と自然環境の分断、純粋な自然へのあこがれなどの視点から全体を考察した。

最後の第 8 章で全体のまとめを行った。本研究では一見中立的にみえる自然の展示や解説にも、特定の社会的な価値基準が影響していることを改めて示すことができた。この研究結果は、人文地理学分野の「自然の社会的構成」に関する議論において、特定の地域の自然環境や地域のイメージが社会的に形成されていることを明らかにできたため、「社会的自然」研究と博物館の展示の政治性に関する学際的な領域の研究の蓄積に寄与することができると考えられる。

一方で、本研究の調査分析では主に文字情報に注目しており、そのほかの情報については分析の対象としていない。そのため、より正確に自然の社会的な構成を把握し理解する上で、文字情報以外の情報にも調査の範囲を広げていく必要がある、などの今後の課題についても言及した。